



## 高澤ろうそく プレミアムギフトパコ



## 高澤ろうそく

江戸時代から伝わる日本の伝統産業「和ろうそく」。和紙の芯に、ハゼや菜種などの植物から抽出された蠟。すべてが天然素材の和ろうそくづくりは、職人と自然との対話のように、微細な変化を肌で感じながら進められます。ゆらゆらと揺らめく大きな炎に宿る、豊かな自然の力。きっと、あなたの日常に心やすらぐ癒しのひとときを届けてくれるはず。

このカタログでは、下記の商品からお選びいただけます。



商品番号 | 7031

### ミニ燭台セット 四季

桜、桔梗、菊、椿と四季の花が描かれた伝統的なデザインの絵ろうそく。

セット内容／和ろうそく「桜・桔梗・菊・椿」各1本（長さ約9cm／燃焼時間約55分）、ミニ陶器燭台（直径約5.5cm、芯の長さ約2.5cm）



商品番号 | 7032

### ミニ燭台セット 菜の花イカリ

菜種油を原料とした和ろうそく。菜の花を思わせる黄色がお部屋を明るく彩ります。

セット内容／菜の花和ろうそく4本（長さ約9cm／燃焼時間約55分）、ミニ陶器燭台（直径約5.5cm、芯の長さ約2.5cm）



商品番号 | 7033

### ミニ燭台セット 祝

お祝いにぴったりの華やかなカラー。朱色は古くから慶事に用いられる伝統色です。

セット内容／和ろうそく「白・朱・金・銀」各1本（長さ約9cm／燃焼時間約55分）、ミニ陶器燭台（直径約5.5cm、芯の長さ約2.5cm）



商品番号 | 7034

### ミニ燭台セット あかりのひととき(薰)

モダンなデザインの絵ろうそく。落ち着いた色合いが和室にも洋室にも似合います。

セット内容／和ろうそく「市松・鹿の子」各2本（長さ約9cm／燃焼時間約55分）、ミニ陶器燭台（直径約5.5cm、芯の長さ約2.5cm）

## What's 高澤ろうそくとは？

1. 日本の伝統「和ろうそく」を誰でも気軽に楽しめる



能登の暮らしに明かりを灯し続ける  
石川県唯一の和ろうそく専門店

明治25年創業。江戸時代から七尾市でつづく伝統工芸「和ろうそく」を生産する県内唯一の会社です。職人の手仕事で作られる和ろうそくは、信心深い地域性を残す能登地方において仏事、神事などの場を支えつづけてきました。現代の生活空間に合った生活雑貨としての和ろうそくも多数企画し、「和ろうそくのある暮らし」を精力的に発信しています。



株式会社 高澤商店  
石川県七尾市一本杉町 11番地  
TEL 0767-53-0406  
[Instagram] takazawarousokuten

2. 伝統的なデザインから現代的なデザインまで、多彩なラインナップ  
3. 蠟の原材料は植物由来の油脂。煤が出にくく、室内で使っても安心





Photo by SUGA KOJI



上／ろうそくの製作はすべての工程が手作業。型から外したろうそくは一本一本刀で削って形を整えます。  
下／和ろうそくの特徴である太い芯。竹ひごに和紙を巻き付け筒状に。上に“灯芯草”と真綿を巻き付け完成です。

## 伝統の和ろうそくは 能登の人々の祈りとともに

かつて奥能登と加賀をむすぶ街道として栄えたという七尾市一本杉通り。『高澤ろうそく』は、この地に店を構えて130年の老舗です。

「能登の人はたいへん信心深いのです。ほとんど毎日、お仏壇に灯りを点して手を合わせます。単に私たちがろうそくを作るというだけでは成り立ちません。地域の人々の習慣に支えられ、育てていただきて、ここまでやってこられました」と話すのは、同社代表の高澤久さん。

和ろうそくで使われる植物性のロウは煤が出にくく、繊細な装飾が施された仏壇や仏具を傷めにくい。選ばれつづける背景に、代々の道具を大切に守り継ぐ能登の人々の気質がうかがえます。

能登半島地震をきっかけに、地域の人々の支えを改めて実感したという高澤さん。

「店舗が倒壊したため『再開は半年後ぐらいに…』と考えていました。ところが震災からわずか2~3週間ほどで、ろうそくやお線香を売ってくれないかというお声が次々に届くようになったのです。それで、ああ、これが能登の人の“日常”なんだと」。

予定を3か月早め、同年3月には仮店舗で営業を再開。現在に至ります。

## 職人の手仕事で生み出される 大きく力強い炎

細い紐を芯として埋め固める洋ろうそくに対し、和ろうそくの太い芯は中空になっており、絶えず空気が供給されることで大きく力強い炎が持続します。この独自の構造を支えるのは、江戸時代か

らつづく伝統的な工程です。現在は20代から60代までの職人が15名ほど。分業制にはしておらず、すべての工程を一人で手掛けることができて一人前なのだといいます。

「手作業であることがとても大切」と高澤さん。あえて効率化を図らない理由のひとつは、芯も蝋もすべて自然素材でつくられていること。

「自然のものは、均質ではありません。“その日によって違う”ということが多い。そうすると感覚的な部分がすごく大事で、職人さんが手で作ったほうがうまく制御できるのです」。

ハゼ、菜種、米ぬか、ウルシ、椰子。原料によって異なる蝶の性質を理解し、対話をするように一本のろうそくを作り上げていきます。

ウルシろうそくは、輪島市の伝統産業「輪島塗」との連携事業。現地で植林が進んでいるというウルシの木から採れる実を買い上げ、蝶の原料として使用しています。

「こうやって協力し合うことが、能登の里山や伝統産業を守ることにも繋がります。これからも続けていけたら」と高澤さん。

## 現代人の忙しい日常に 和ろうそくの癒しを届けたい

都市部や県外に目を向けると、仏事とかかわりをほとんど持たない人も少なくありません。しかし、和ろうそくだけが持つ大きな炎、自然のゆらぎ。この癒しを多くの人に届けたいと考え、30年前から販路拡大の取り組みを始めました。

現在は仏壇店だけでなく生活雑貨店や百貨店でも販売。リビングや寝室にも似合う現代的なデザインの絵付けろうそくや、気軽に和ろうそくを始

められるろうそくと燭台のギフトセットなども企画し「和ろうそくのある暮らし」を積極的に提案しています。アメリカやカナダにも出荷。食卓にキャンドルを灯す習慣があるといい、無香料かつオーガニック素材の和ろうそくは人気を集めています。

## 今も昔も変わらない灯火を

和ろうそくを未来に繋ぐためのさまざまな取り組みを続ける『高澤ろうそく』では、伝統のフォルム「いかり型」に革新をもたらす挑戦も。20年前、上部にかけて太くなる和ろうそく独特の形状にこだわらず、能登の植物のなだらかな曲線美を表現した「和ろうそくなお」を企画。斬新で芸術性の高いデザインが国内外の人々に歓迎され、現在まで続くロングセラーとなっています。しかし開発当時、初めてデザイン画を目にした高澤さんは「果たしてこれは“和ろうそく”なのだろうか?」と随分悩んだのだと振り返ります。

それでは、和ろうそくとは何をもって和ろうそくと言えるのか?今に至るまで自問自答を続けています。現時点での答えは、つぎの通り。

「ひとつには、日本各地から届けられる自然素材を使い続けること。もうひとつは、この独自の芯材です。これまでの人々の努力や工夫を経てこの形に辿り着いたことが伝わってきます。これは、ずっと変えずに続けていきたい」。

最後に「そうすることで、江戸時代の人が見ていたのと同じ灯りを、現代を生きるわたしたちも見ることができますから」と結んだ高澤さん。

揺れる炎に神秘を感じ、心が解放されるひととき。昔も今も、きっとこれからの時代も、人々は同じ灯火を見つめ続けていきます。



Photo by SUGA KOJI



Photo by SUGA KOJI

石油を精製したパラフィンで作る洋ろうそくに対し、和ろうそくで使われるのは植物由来の油脂。食卓でも安心して灯すことができます。



『高澤ろうそく』の建物は震災により全壊(※写真は震災前の店舗外観)。解体して新たに建てる道を選ばず、修復して元通りに再建する取り組みを進めています。一本杉通りの歴史ある建物のひとつが力強く蘇りゆく姿が、人々に勇気を与えています。(2025年10月現在)